

マツノクロホシハバチ

秋にマツの葉を集団で食べるイモムシ（幼虫）。最大長約25mm。体は黄色，頭と尾端は黒い。

1980年代後半から1990年代前半に日高地方で大発生した。



1. 終齢幼虫，最大長25mm。1990/10/25.



2. 繭，長さ8mm。1990/10/24.



3. 雌成虫，体長8mm.



4. 雄成虫，体長6mm.

1～4. 様似町のキタゴヨウ人工林で多発した個体群.

【学名】 *Diprion nipponicus*

【分類】 ハチ目 (Hymenoptera) , ハバチ亜目 (Symphyta) , マツハバチ科 (Diprionidae)

【分布】 北海道，本州，四国，九州.

【特徴】

幼虫は終齢で体長25mm。体は黄色。頭部，胸脚，腹端の背面は黒い。集団性。

雄成虫は体長8mm前後，体が黒く，触角は櫛状。近似種との区別は外観からは困難。雌成虫は体長9～10mm，黄色で黒い斑紋がある。触角はバットのよう形。

【生態】

宿主：マツ属（アカマツ，クロマツ，キタゴヨウ，ストロブマツ，ヨーロッパアカマツ，ハイマツなど），カラマツ。

マツ属につくものとカラマツにつくものとは生態的に異なるといわれている。カラマツに寄生するタイプは北海道では見つかつ

ていないが、マツを食べ尽くした後、そばのカラマツを食べる例が観察されている。

北海道では年1回発生。成虫は7月下旬から8月下旬に羽化する。雌成虫は卵を1葉6～10個ずつに分けて8～10枚の葉にまとめて産み、幼虫は老熟するまで集団で葉を食べる。幼虫の食害のピークは9月中旬から10月中旬。10月中旬から11月初旬に幼虫は地面に降りて繭を作ってその中で越冬する。繭を作る場所は落葉の中、松ぼっくりの中、草の葉の上などである。

北海道の多発地では小哺乳類による繭内幼虫の捕食率が場所によっては98%に達しており、被害の終息要因として重要と考えられる。このほか、寄生性天敵であるヤドリバエ科の1種とヒメバチ科の1種が繭から出てくるが、寄生率は低い。

【被害と防除】

1990～93年に日高地方で突然多発し、北海道内における分布が初めて確認された。侵入害虫である可能性が高い。このときの被害により人工林、庭木、街路樹などで枯死木が発生した。同地では1988年ころから庭木のストロブマツやヨーロッパアカマツで小規模な発生がみられたという。その後、西は浦河町、東は大樹町で発生が確認されている。近年、発生は小康状態である。

なお、海岸近くは被害がほとんどなく、クロマツ海岸林でも被害は発生していない。また、カラマツも被害を受けていない。

森林では殺虫剤の空中散布以外の防除方法は確立されていない。日高地方の被害では発生地が保護水面と近いことから、薬剤の空中散布は見送られた。

庭木など緑化樹で幼虫集団をみつけたら取り除く。農薬による駆除が必要と判断される場合、マツ類のハバチ用の農薬として

MEP乳剤がある。農薬は取扱説明書に従って使用し、散布にあたっては通行人や近くの住民らに十分配慮すること。

【文献】

1986. 福山研二. 解説林木を加害するハバチ類(2) マツノクロホシハバチ. 森林防疫, 35: 35-36. (概要, 生態)

*1991. 小泉力, 前藤薫, 東浦康友, 原秀穂. 平成2年度に北海道で発生した森林昆虫. 北方林業, 43: 155-161. (北海道での被害記録)

1994. 滝沢幸雄. マツノクロホシハバチ. 小林富士雄, 竹谷明彦, 編集. 森林昆虫: 337-338. 養賢堂, 東京. (形態, 生態, 防除)

*1995. 東浦康友, 原秀穂. マツを枯らす害虫, マツノクロホシハバチ. 光珠内季報, 98: 16-19. (北海道での被害, 薬剤防除試験)

*1998. 東浦康友. 日高地方でのマツノクロホシハバチの大発生. 森林保護, 266: 26-28. (被害の推移, 生態, 天敵など)

*の文献は北海道立林業試験場ホームページの「北海道立林業試験場・研究成果文献データベース」で見ることができます。

北海道立林業試験場・緑化樹センター

マツノクロホシハバチ habahoka/matukuro/
kaisetu.htm

「文章」原秀穂, 北海道立林業試験場, 1995/4/20-2001/8/23.

1yochu.JPG, 1mayu.JPG, 1seichu1.JPG, 1seichu2.JPG

「写真1～4」原秀穂, 北海道立林業試験場, 1990.